世代を越えたバンブーロッド。左からオービス、パウエル、レイシー、サマーズ、ヤング、ペイン、ブランディン、ウジニッキ、F.E. トーマス、ヘドン

新連載

現代アメリカのバンブーロッド事情【前篇】

文・写真　永野竜樹
ながのたつき／東京都／ 自営業

この 10 年でバンブーロッドの世界には大きな革命が起こりました。
これまで 100 年以上にわたって積み上げてきた伝統なりノウハウをみんなで共有し、
さらに進化しようとする姿が浮かび上がってきます。
ですから、バンブーロッドが第 3 世代でおしまいなどとはとんでもない話で、
第 4 世代への移行が新しい形で着実に進んでいます。
やはりアメリカのバンブーロッド界、恐るべし。

キャッツキルがフライフィッシングで華やかりし1960年代、父の仕事の関係で私はニューヨーク郊外に住んでいました。子供の頃から水を見れば魚の影を気にかける性分で、5、6歳の時にはすでに釣りの世界に足を踏み入れていました。

とはいっても当時はフライフィッシングの存在など知るよしもありません。中学時代は津久井湖のバス小僧となり、学生時代には背伸びをしてフライフィッシングを始めましたが、キャストすると後方で常に爆竹が炸裂する状態でした。

金融機関への就職後、転勤で四半世紀振りにニューヨーク在住となりましたが、キャッツキルには目もくれず、フロリダ・バスに憧れてせっせとルアーを買い込んでいました。

その後日本に戻り、40歳にして初めて手にしたレナードに身震いし、さらにジム・アダムスのアンティーク・カタログに感銘を受け、アメリカのバンブーロッドへ急旋回することになります。

オークションを通じて知り合ったアメリカのコレクターにも感化されました。いまだにバンブーロッドへの熱が冷めることはありません。

1

〝アメリカの竹竿職人たち〟は10年後の今どうしているか

阪東幸成氏の『アメリカの竹竿職人たち』（1999年10月初版）が出版されて早10年が経ちました。あの本に衝撃を受けた私は繰り返し読み返し、ビルダーの方々へ自分でオーダーをしました。

『アメリカの竹竿職人たち』で紹介されたバンブーロッド・ビルダーの皆さんは、現在どうされているのでしょうか。

現代アメリカのバンブーロッド事情を記すにあたり、まず始めに2010年現在の彼らの状況を私の知っている範囲で紹介したいと思います。

左からオービス、パウエル、レイシー、サマーズ、ヤング、ペイン、ブランディン、ウジニッキ、F.E. トーマス、ヘドン

ハウエルズ、シャーフ、キューシー、カーペンター

ゲーリー・ハウエルズは残念ながらお亡くなりになられました。機材やテーパーはロバート・K・ボルトに継承されています。

第二次世界大戦では海軍にいたジム・シャーフも相当のご高齢で既にリタイヤされました。彼はライル・ディッカーソンのミリングマシンを引継いだことで知られていますが、その機械は後継者のジョン・ピカードの手に移っています。

レナードで活躍したロン・キューシー、ウォルト・カーペンターともまだ現役ですが、製作本数はピーク時に比べるとはるかに少なくなっています。キューシーは1934年生まれですので、恩年76歳になります。

サマーズ、アロナー、ブラケット

高齢といえばロバート（ボブ）・サマーズもそうで、近年はロッド製作よりビンテージ・ロッドのブロカーレッジに勤しんでいる感があります。

じつは私は阪東さんの本を読んですぐにサマーズへ注文したのですが、ついひと月前に、10年かかってようやくロッドが私の手元に到着しました。

「早く作ってくれないとあなたがロッドを作れなくなるばかりではなく、私も年老いて釣りにいけなくなる」という脅迫めいた執拗なメール攻撃に、ようやく応じていただけたのだと思います。というわけで、サマーズがまだまだ現役であることが確認できました。

トーマス&トーマスやレナードに在籍したマーク・アロナーも最近は年間製作本数が18本未満だと自分で述べていますが、今年の頭からスピノザ・ブランドを立ち上げ、ペインを意識したロッドの製作を意欲的に行っています。

グレン・ブラケットは皆様ご存知のとおりウィンストン社を離れ、ブー・ボーイズと呼ばれる仲間とともにスウィート・グラス社を立ち上げ、バックオーダーを抱えながらばりばりと製作に勤しんでいます。

ウジニッキ、ブランディン、クラーク

日本で人気の高いマリオ・ウジニッキは当初スコット社のバンブーロッドを手がけていましたが、その後グラスロッドの製作でも活躍しています。

現役ビルダーではセカンダリー・マーケット（中古市場）で最も高値の付くペア・ブランディン、およびコロラドの

巨匠マイク・クラークは、すでに生涯製作本数を超えるバックオーダーを抱えているため、実質的な新規注文には応じていない（というか5年以上待つので…）とも言われています。

2 アメリカのバンブーロッドはどのように発展してきたか

第2、第3世代のロッド、手前がヘドン・デラックス、奥がペイン

1992年にディック・スパーの書いた『クラシック・バンブー・ロッドメーカーズ』で紹介されているビルダー45人のうち、既に半数以上の方が亡くなられ、残った人たちも高齢化で現役のピークを過ぎています。日本の後を追って急速に高齢化するアメリカで、アメリカン・バンブーロッド・メーカーの歴史は途絶えてしまうのでしょうか。

そんなことはありません。現代のアメリカでは、過去の伝統を踏襲しながらも新進気鋭のプロ・ビルダーたちがどんどん出てきています。アマチュア・ビルダーらもますますもって意気軒昂です。

今なおアメリカでのバンブーロッド人気は年々向上しています。なぜか。それを理解するには、アメリカのバンブーロッドがどのように発展してきたのかを理解しておく必要があります。

バンブーロッド作りの基本は今から100年前に固まった

米国フライフィッシング百数十年の歴史にあって、バンブーロッドの厚みは日本の比ではありません。1870年代から1900年初頭にかけてのフライロッドの素材はランスウッドやグリーンハートといった木材が中心でした。その後カルカッタケーンでバンブーロッドが作られるようになりました。

米国東海岸を中心にチャブ、オービス、エドワード・ヴォンホフ、レナードやディバイン、F.E.トーマス、ランドマン、エドワードなどのメーカーが勃興し、トンキンケーンに火入れをして六角に張り合わせるという、現在のバンブーロッド作りの基本がこの時代に固まります。

ウエットフライ一辺倒であった釣り方にドライフライが加わるのもこの頃です。釣り方の多様化とともにロッドテーパーも種類が増えました。ロッドを構成する他のパーツ、例えば現在見られるリールシートやフェルール、ガイドなどの形状が決まったのもこの時代でした。

プロダクション・バンブーロッドメーカーの繁栄と衰退

1929年の大恐慌後の不況から景気が徐々に回復する過程で、レジャーに対する需要が高まってきます。そんな中、プロダクションメーカーが勢力を持つようになり、市場には大量のバンブーロッドが出回ることとなります。プロダクションメーカーとは、大きな工場でバンブーロッドを大量生産していた会社です。

廉価版の代表格ではホロックス&イボットソン、モンタギュー、サウスベンドなどが有名です。もう少し上級なバンブーロッドの製造先としてはヘドン、グッドウィン・グレンジャー、フィリプソンなどがあり、そして高級路線ではオービスがありました。

第二次世界大戦を迎えると、軍事に関わる技術革新でナイロンやグラス繊維が発展し、戦後はグラスロッドが